

毎年、学年末が近づくと、全学共通カリキュラム運営センターの広報委員のひとりが、センターの紀要である『大学教育研究フォーラム』（以下、『フォーラム』とする）の「あとかぎ」を執筆することになる。たった今『フォーラム』はセンターの紀要であると言ったが、教員個々の研究成果の発表の場としての性格が強い学部等の紀要とは異なり、『フォーラム』はセンターが強い編集機能を発揮して、全カリ科目の運営という日常業務を遂行するなかで教養教育、さらには広く大学教育全般にかかわって感じた現状の問題点、そして未来への展望・希望を広く学内外に伝えるという側面の強いものである。そのため、センターでは年度の前半から全カリ部長を委員長とする広報委員会で議論をかさね、『ニュースレター』とともに『フォーラム』の構成を決定していくのである。当然、そこに掲載されるさまざまなコンテンツからは、全カリがかかえる問題点や、その解決の方向性として考えられているものが、浮かび上がってくるはずである。

そうした目でこの第19号を眺めてみるならば、近年の号ではひとつ掲載されるのが定番になっていた、センター企画の座談会の筆録が2つになっていることに気付く。その一方は、全カリ運営センターに先行する一般教育部の時代にまでさかのぼって、教養教育の移り変わりを考えようとする「特別座談会 一般教育部、そして全カリ ～移りゆく教養教育の先を考える～」であり、他方は、今まさに立教が全学的取組みを強めている最前線のグローバル教育をとりあげた「特集 座談会 立教のグローバル教育を考える」である。それは、うがった見方をすれば、運営センター設立から20年となる2014年、全カリは、その設立以前から引き継いでいる教養教育とは何かという歴史的問題と、大学の営みを根本から変えることにつながざるをえないグローバル教育という今日的課題の両方に同時に立ち向かわなければならぬということを象徴している。そして、筆者は、この難局を乗り切るのに全カリが貢献できるひとつの有力な「武器」が、1997年以来ユニークな授業を次々と展開してきている総合B／主題別Bであるように感じている。そう言えば、これもまた『フォーラム』の定番コンテンツとなっている全カリシンポジウムの筆録であるが、今号に再現される昨年秋の全カリシンポジウムは、「知のコラボレーション～主題別Bの魅力～」であった。

というように、『フォーラム』掲載記事のすべてを全カリ運営センターがかかえる課題に無理やり結び付けて読んでいただく必要はもちろんないが、編集作業にかかわってきた者のひとりとして、あえて「深読み」の勧めを書かせていただいた次第である。

あおき やすし

(本学文学部教授／全学共通カリキュラム運営センター部長)